

左辺割れ。裏面は偏の残画のみ残り、二文字目は人偏であろう。

二 第二六一次調査

(1)



125×102×13 066

上下両端は切断。左右両辺も切断と判断したが、自然の割れの可能性もある。また、加工と墨書の前後関係は不詳。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『昭和五六年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（一九八二年）

同『一九九五年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（一九九六年）

同『平城宮発掘調査出土木簡概報』一五、三三二（一九八二年、一九九六年）

（山本 崇）

奈良・平城京跡左京三条二坊一坪

へいじょうきょう

- 1 所在地 奈良市二条大路南二丁目
- 2 調査期間 第一九〇次調査 一九八八年（昭63）五月～二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 町田 章
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九八六年から八九年にかけて実施したデパート建設に伴う発掘調査では、総計一一万点にも及ぶ木簡が出土した。その大半は、左



（奈良）

京三条二坊八坪東南隅の南北溝状土坑SD四七五〇の長屋王家木簡約三五〇〇点と、八坪北側の二条大路上の濠状遺構SD五一〇〇・五三〇〇・五三一〇の二条大路木簡計約七四〇〇〇点が占めるが、他にも多数の遺構から木簡が出土し

ている。本誌では各調査出土の主要な木簡を既に紹介したが、本誌未報告の調査の存在が判明したため、ここに報告する。

木簡が出土したのは、一坪南辺の奈良時代末期（一坪占地の時期にあたる）の井戸SE四八八五で、井戸枠は一辺八〇cmの方形縦板組隅柱横棧どめ、掘形は径二・一mの円形、深さは二・九mで、底に円礫を敷き、径六八cmの円形曲物を据える。木簡は掘形と井戸枠内から各一点、計二点出土し、井戸枠内の一点のみ積読できた。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「く厚狭郡地子米五斗」

1.3×2.3×3 0.32

長門国厚狭郡の地子米の荷札である。公田の地子米は太政官の雑用に充てられ、同じ一坪の井戸SE五一四〇や同坪の包含層から墨書土器「官厨」が出土したことから、旧長屋王邸に設けられた光明皇后宮の廃絶後再び国家の管理下に置かれたこの地が、奈良時代末に太政官厨家として利用された状況が窺える。長岡京の太政官厨家は左京三条二坊八町にあり、平城京における位置をほぼ踏襲していると考えられる。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城京木簡』一（一九九六年）

同『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』（一九九六年）

（渡辺晃宏）

奈良・平城京跡左京三条五坊十坪

へいじょうきょう

- 1 所在地 奈良市芝辻町一丁目
- 2 調査期間 二〇〇三年（平15）四月～八月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 清水昭博
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地点は左京三条五坊十坪の西辺で、東五坊坊間路が想定される位置にあたる。



（奈良）

調査の結果、飛鳥時代、奈良時代、平安時代の三時代の遺構を検出した。奈良時代の遺構には、東五坊坊間路とその東側溝、坪を区画する溝、宅地を囲う土塀基壇と門、土器埋納遺構などがある。

東五坊坊間路とその東側